

地域活性化や持続可能な社会の

北海道奥尻町地域政策課政策推進係長

構築につながる教育魅力化

井田 憲太

高校存続に向け「町立移管」

奥尻町唯一の高校である北海道奥尻高等学校は、昭和五〇年四月に北海道江差^{えさし}高等学校奥尻分校として開校し、その二年後の同五二年四月に北海道奥尻高等学校となりました。当時は二間口（一学年二学級）校として歩んでいましたが、平成一四年四月からは一間口校となり、その後は定員割れの状況が続いたことで、北海道が定める公立高等学校配置計画において統廃合を視野に入れなければならない状況となりました。

仮に奥尻高校が廃校となった場合、進学を考える中学生は、島外の高校などに進路を選ばざるを得なくなります。保護者の負担は大きく、場合によっては一家転住による人口流失も考えられ、過疎化対策にも悪影響を及ぼします。また、（高校

がないため）一度島外に出た者が町に戻って結婚・子育てをすることが従前より難しくなり、後継者や担い手対策にも影響が生じることが予想されます。

○歳から一〇〇歳ほどの島内人口の年齢構成の中で、活力のある高校生世代の人口が空白となることは、まちづくりの面などにおいても計り知れない影響があります。そこで町では、奥尻高校の存続は重要な政策の一つと判断し、高校の「町立移管」を目指し、町独自の判断で高校を存続できる環境の整備に取り組みしました。

その結果、北海道からの支援などを受けながら、平成二八年度より町立高校に移管されました。この町立移管により、奥尻高校の存続は町の判断に委ねられることとなり、定員が下回る状況に陥っても存続は可能となりました。

特色ある学校づくりを推進

この町立移管と並行して検討を進めてきたのが高校の教育魅力化と「島留学」の取り組みです。当時、町内の小中学校の児童・生徒数の推移から、奥尻高校の生徒を地元出身者のみとした場合、数年後には生徒数一桁台の学年が続くことが予測されました。町では、このような状況では、集団学習や部活動・生徒同士の交流の面などで公立高校としての良好な学習環境が提供できず、奥尻高校への進学を目指す生徒の確保が年々難しくなると考えました。生徒数の減少は、高校の存続も含めた運営面だけでなく、町の衰退にも影響を及ぼします。

そこで、島内出身者以外で生徒数を増やす対策（島留学）について検討を進めました。下宿先の受け入れ体制を確立し、島外から生徒を募集することが最も効果的な対策になるとの結論から、さまざまな支援策や高校の教育魅力化を推進していくことにしました。

北海道奥尻高等学校は、平成二八年度より名称をそのままに町立高校として新たにスタートしました。「まなびじま奥尻プロジェクト」と称し、以下のような島全体を学校とみなす特色ある学校づくりを推進しています（本誌二六九号「島の学校から」もあわせてお読みください）。

① スクーバダイビング

スクーバダイビングは、子どもたちがふるさと奥尻島のきれいな海について学ぶことで郷土愛を育むとともに、北海道南西沖地震（※1）を経験した海にふれることで、環境保全や防災意識の向上を図るために実施（選択授業）しています。



奥尻の海の実感できる「スクーバダイビング」。

きれいな海に囲まれた奥尻島で、仲間とともに感動を味わいながら、三年間をかけて初級から上級へとステップアップしていきます。また、八月には学習の成果として楽しむことを目的とした「ファンダイビング」を行なっています。

初心者でもスクーバの基本的な資格である「NAUIオープンダイバー」の取得が可能で、さらに、国家資格である「潜水士」にも挑戦することができます。

②奥尻バブリシティ本部

奥尻バブリシティ本部は、奥尻島が抱える多様で現代的な課題を探究し、解決を図り、広報を通じて地方創生に関わり、町の活性化を目指す取り組みです。

奥尻島の魅力や価値をさまざまな視点から発掘し、実地調査や聞き取り調査で得られる発見や気づきを、チームに分かれて情報発信していきます。各班が、自分たちの強みを最大限に生かした発信方法を工夫することで、表現力の向上などにつながります。

③町おこしワークショップ

本活動は、年間を通じて「総合的な探究の時間」で実施しています。ここでは、奥尻島で活躍するさまざまな分野のプロフェッショナルを講師として招き、各分野の課題についてお話ししていただき、その課題解決策を自ら考えていくことで、地域創生の主体者としての意識を養っています。

現代で必要とされている課題解決能力を生徒全員が身につけることで、

新しいことに対して臆せず挑戦していく人材を育成することができると考えています。また、島内で起業する人材を育成するための起業家教育の視点も取り入れています。

④Wi・Fi二ーネー

町内に塾や予備校が存在しないという課題に対して、Wi・Fiを活用した遠隔個別指導の実践により解消を図っています。難関大学に在学している大学生に依頼し、高校生に遠隔個別指導を行なってもらうことで、受験や普段の勉強に対するモチベーションの向上につながっています。

ICTは、離島にいながらにして、最新の情報のみならず、さまざまな方々の厚い支援を受けられる重要なツールになっています。

⑤その他

奥尻高校は、連携型中高一貫教育を進めており、高校生が



地域の課題解決に取り組む「町おこしワークショップ」。

中学生に対するサポート活動を行なう「メンタリングシステム」を実施しています。また、コミュニケーションスキルを習得するための「ピアサポートプログラム」、奥尻町海洋研修センターなど学校とは別の場所から一人ひとりが集中して勉強する「まなびづけ」なども行なっています。

町では、これらの活動を中心に、学力はもちろん社会人になっても必要となるさまざまな力が子どもたちに身につくようなカリキュラムを実践しています。人として大きく成長できる、魅力ある学校づくりを進めることが、奥尻高校への進学を目指す生徒の確保・増加につながるものと考えています。

安定的な留学生の受け入れに向け寄宿舎を整備

教育の魅力化を図り、全国募集により町外からの入学生を受け入れるにあたっては、生徒たちの居住先の確保が課題でした。島留学初年度の平成二九年度は、町内に二〇軒以上あるすべての旅館・民宿などに足を運び、留学生の受け入れ協力を要請。なんとか体制を整えることができたため、生徒の募集を始めました。

二年目以降は、前年度の新入生の受け入れ状況を踏まえ、新たな受け入れ先を確保。三年目以降も同様としていましたが、

さらなる受け入れ先の確保が限界を迎えたため、長期的な展望を踏まえ、寄宿舎を建設し安定的な受け入れ体制を構築することとしました。

平成三〇年度の第一期工事（二〇部屋）から始まり、令和元年度に第二期工事（二〇部屋増築）、同五年度に第三期工事（二〇部屋増築）を行ない、現在の受け入れ体制となっています。しかし、近年では奥尻高校のみならず、各地で全国募集を行なう学校が増加しています。競争が激化していく中で、奥尻高校を進学先として選択いただくためには、受け入れ体制の充実だけでなく、広報活動の工夫やさらなる教育の魅力化による差別化を図っていく必要性が出てきていると感じています。

進路実現やU・Iターン者の獲得

上述の奥尻高校の教育魅力化の取り組みは、多くの成果（効果）をもたらしています。

まず進路面においては、生徒自らが主体的に学び、表現する力を育成する魅力的な教育活動が評価され、立教大学をはじめ数多くの学校から指定校推薦枠をいただいています。国公立大学への進学実績も多数あり、卒業後の多様な進路の実現に応えることができています。

島内出身の生徒たちも、教育魅力化を通して全国各地から集まってくる留學生たちとの集団生活や、地域の方々とのふれあいを通じて多くの刺激を受けるとともに、さまざまな考え方を受容する能力を身につけています。また、入学生の増加は、高校運営の安定化にもつながり、卒業まで安心して学業に努めることができる環境になっています。

教育魅力化の取り組みにより奥尻の魅力に気づき、地域への愛着を育んだ卒業生のなかからは、進学などで一度島外へ出たものの「島に帰りたい」とＵターンし、一次産業や観光産業の担い手となる事例が出てきました。島の資源を活用した魅力的な教育により、島を愛する卒業生を多数輩出することで、将来的に移住・定住につながりたいと考え全国募集を開始し、実践を続けた町の取り組みが少しずつ実を結び始めているのを感じます。

このほか、令和五年度からは国土交通省国土政策局の「地方応援隊制度（※２）」を活用し、奥尻高校卒業生のコミュニティを発足。関係人口の創出や卒業後も町に関わり続けることができる仕組みづくりを進めています。

島の未来を担う人材づくりを目指して

上述の通り、教育の魅力化は、学校教育の現場を超えて、地

元住民の進学による家族層の維持、Ｕターンや関係人口の増加、地域の担い手づくりなど、地域活性化や持続可能な社会の構築にもつながっています。今後は、奥尻高校の教育魅力化のみならず、町内すべての学校において教育ＤＸの取り組みを進めていきたいと考えています。

今年度から「奥尻町教育ＤＸ・Step-Up事業」として、奥尻が誇る自然と歴史、人を敬う心を大切にしながらも、ＩＣＴを活用することで離島であるが故に抱える教育のハンディキャップを解消し、高度情報化やグローバル化など急激な社会経済環境の変化の中でも、成長し続ける人材の育成を目指す取り組みを推進しています。

その取り組みの一つとして、私塾などが島内にはない状況を鑑み、学校外での学習活動の場となる「Web AI塾」を開設しました。小中学生の児童・生徒には、学習意欲と学力の向上のため理解度に応じたＡＩドリル教材を提供することで、個別最適な学習法を提案します。学校では、専用ウェブサイトを通じて児童・生徒の学習進捗と達成状況を確認することが可能です。

また、「Society5.0（※３）」時代を支える発達段階に応じた情報活用能力の育成・高度化に向け、ＧＩＧＡスクール構想で整備したＩＣＴ環境を高機能化・拡充し、「ウェブSTEAM学習（※４）」により、町で学ぶ児童・生徒の資質の向上に努

—離島留学経験者からの言葉—

島留学生として過ごした奥尻に恩返しを

私は、北海道美^び唄^い出身で、高校進学まで奥尻島を訪れたことがありませんでした。奥尻高校へは、環境を変えたいという思いと、島暮らしに憧れてという理由から進学を決めました。

「まなびじま奥尻高校」では、町おこしワークショップやスクーパダイビングなどの島を活かした授業があります。これらの授業を通じ、五感で島を感じながら課題や特徴などを学び、地元の方々ともふれあえることが奥尻高校の強みだと思います。また、生徒数が少ないので人と人との距離が近く、年齢関係なく交流できるのも魅力です。

現在、私は奥尻町の地域おこし協力隊として観光協会に勤めています。社会人として奥尻島で過ごしてみたい、島留学生として暮らした島に恩返しをしたいと思い、令和5年に移住しました。高校生の頃には見られなかった景色や新たな人との出会いなど、当時とは違う楽しみがありとても満喫しています。また、卒業後でも島とつながり続けられるコミュニティを立ち上げ、役場と連携ながら島外での学校説明会の協力を卒業生などに依頼しています。

奥尻高校は、島にあってもしっかりと新しいことや人・考え方に会える場所です。地域みらい留学の実施校は増加していますが、「まなびじま」の強みを活かして入学生が増えていくことを期待しています。

(令和2年度卒業生 浦山ひかる)

めまします。内容は、島外の教育機関・企業などとの連携による遠隔でのプログラミング学習の実施、島外の学校とのウェブ遠隔交流、eスポーツや「STEAMライブ러리」の利用など近未来の学習体験の場の提供、生成AI対応のロボット技術の活用などで、児童・生徒向けの学習支援を進めます。

さらに、先端企業などの協力による「ウェブキャリア教育」

を実施することで、地域産業が限られている奥尻町において、多様な職業とのふれあい——特に高度情報化・グローバル化に対応して生まれる新たな職業との出会いなどによるキャリア意識の形成面での課題を解消し、未来志向の確かな進路情報[■]の獲得と合わせて進路選択の幅の拡大につなげていきます。教育の魅力化を通して、奥尻町で学ぶすべての子どもたちが自らの可能性を信じ、成長し、いずれ島の未来を担う人材となることを期待し、今後もしっかりと進めていきたいと考えています。

※1…一九九三年七月二日に発生したマグニチュード七・八の地震。島の西海岸での遡上高二九メートルに達する大津波や火災も発生。死者・行方不明者二二〇人（奥尻町HP）を出した。

※2…一部の条件不利地域の小規模市町村に対し、志願した若手職員を割り当て、当該市町村が抱える課題解決を支援する国土交通省国土政策局の取り組み。

※3…日本政府が提唱する未来社会のコンセプト。サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する新たな未来社会。

※4…科学（Science）、技術（Technology）、工学（Engineering）、芸術（Art）、数学（Mathematics）の五分野を統合的に学ぶ「STEAM教育」をウェブ上で実施する学習。

井田憲太（いだけんた）

奥尻町地域政策推進係長。昭和六一年奥尻町生まれ。平成一七年奥尻町役場入職。令和五年度まで教育委員会事務局に勤務し、奥尻高校の町立移管や全国募集などの業務に携わる。同六年度より現職。